

旅人雜筆

●其五●

青海川

眞如の月、
満月の曉野

牡牛も眠る沈黙の夜

秘密の如く啞の如く

寂黙の迴轉

音なき旋律の

『永劫』の羽摺して

たゆみなく星と共にいきづく

我は静かに風車の爲に

慈なれと祈るなり。

汝が病み

世の工匠や名匠や巨匠が

技を盡し智囊絞りても

永世癒えざる創痍を負はば

我、骸骨を汝が前に投げむ

咄、見よ！

雲を呼ぶ疾風一陣

我が心の幻影は

ながくくく

ものものしくも中天を翔ける

(その六)

▲創 作▼

或る男

◆生

心なき旅である。

かねてよし思ひしこよ椎柴の

は局椎柴の心なき戀である。

旅心は純真であらねばならぬ。

歌詠んで百々ふらした能因は歌の

名人であるに相違ない、しかも私は

人の技巧つひに正直なる龍神を瞞

したものではないかを怪しむ。

戀は純真であらねばならぬ。

遊びを爲した女に何故歌道の神の崇

りなきかを怪しむ。

○私が芭蕉を語り一茶を呼び、美濃

の惟然にさへ及んだのは、その俳諧

のためでない。私は茲で俳諧師の話

をしやうどはしてゐない。『人』であ

る、『こゝろ』である。

○旅する人のこゝろは、自然人のこ

こゝろである。

あり真であり善である。

美で

あらじある。

居た。

高橋直衛・海老茶荷に漸々しい妻

を日々程近き學校に運んで居た信子

を買ひた。

居た。

元來虛弱な彼は外人仲間と到

窮の淵より逃げ出した様にはつまし

居た。

吉は其所でカマラーダとして働いて

底共に働ける筈もなく過度の疲労や

だ。

斯う考へた彼は又直ぐと生皇の淵へ

居た。

元來虛弱な彼は外人仲間と到

窮の淵より逃げ出した様にはつまし

居た。

吉は其所でカマラーダとして働いて

底共に働ける筈もなく過度の疲労や

だ。

吉は其所でカマラーダとして働いて

